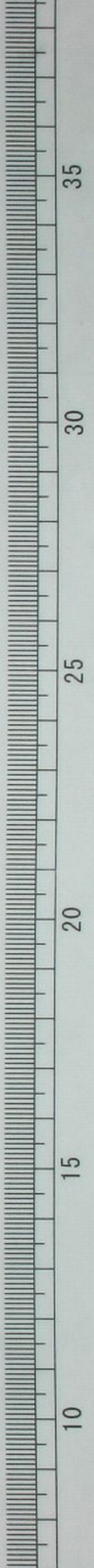




采女瑣語

四

柳田文庫  
文庫11  
A1410  
4



文庫11  
A1410  
4

### 周清外史

日本馬杉繫先生著 全部廿二卷  
清 王治本先生關 合 十三冊  
定價三圓廿五錢

近世所行支那略史類記事過簡實省怪異百出訛誤無稽讀者之厭先生慨然執筆抽其上周平王以下清今日至元治亂興亡謀戰忠邪跡歷々詳記怪異ノ削荒誕ノ糾姓氏ニ因編之立日本外史体制擬名周清外史上之弊舖之先生三請梓三上世播ス号讀史各位最寄書肆於此書ヲ購求賜其直筆精妙ヲ疎漏ナキヲ審ニ幸甚

書肆

東京日本橋區本石町貳丁目

江嶋喜兵衛

柳田泉之丞

### 閑窓瑣談卷之四

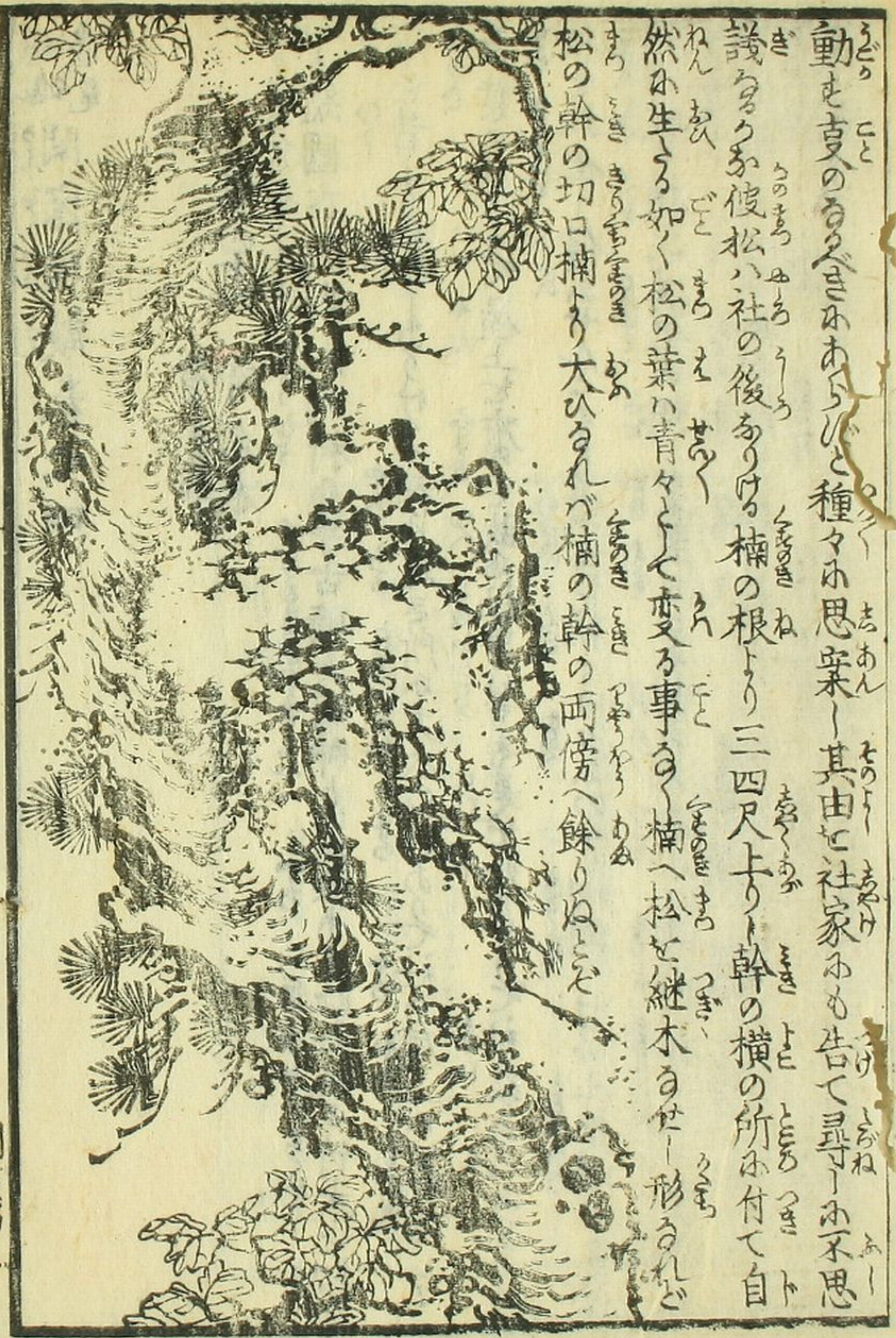
#### 第四十四

#### 奇名木

下總國在佐郡飯岡村の古崎大明神といふ社あり此社地の竹木を切る事と昔より禁ありけりが社近き所の大木の松ありて社の屋上の葺ひは落葉のほりて屋上を腐と故に杉男等も是と知るをて社家みかみてその松を切倒し價おせんところ或日の朝より夕ふゆる切倒しけりが土地廣げまほ梢の枝も拂いで其俣の倒し置翌日とて材木を造んと其夜の捨て返り翌朝の成行看とて這の如何切らる松の見えれが杉人の大ひの敬馬き四辺を見ても更なる然りとて切らさし渡り三尺餘の大木ると五人七人の所為めて

閑窓瑣談

閑窓瑣談



閑意四

動を夏ふゆのことることきことあことらことびことと種たね々々小思こし案あん一其由そのよしと社家しゃかのこと告つひてこと尋たねりことあこと不ふ思し  
 議ぎることあこと復ふた松まつのこと社しゃの後のちありことけること楠くすのぎのこと根ねよりこと三さん四し尺じやく上かみりこと幹かみのこと横よこのこと所ところみこと付つきてこと自みづからこと  
 然しかんこと生なること如ごとくこと松まつのこと葉はのこと青あお々々とこと変かること事ことること楠くすのぎへこと松まつをこと継つぎ木きることせこと形かたちることれこと  
 松まつのこと幹かみのこと切きりこと口くち捕とらりこと大おほひことることれこと楠くすのぎのこと幹かみのこと両りやう傍はたへこと餘あまりことぬこととこと

最もいそあことること事ことのこと人ひと力ちからのこと及およぶこと所ところ為なることあことらことねこといこと全まことくこと神かみ靈れいのことまことせこと玉たまふことりことのこと  
 ろことべこととこと人ひと々々恐おそまこと敬うやむことひことけことりこと

第四十五 土中の宝

筑前ちくぜんのこと國くに博はく多たのこと市し中ちゆう小せう路ろ町ちやう上じやう濱はまのこと町まち人ひと具ぐ竹たけ善ぜん三さん郎らうとことらことふこと者もののこと妻つま病びやう死し  
 けことのこと聖せい福ふく寺じのこと塔たつ頭とう瑞ずい應おう菴あんとことらことふこと英えい送そう一いつ墳ふんとこと堀ほり一いつ丈じやう許もとりことりことか  
 一いつのこと壺かめをこと堀ほり出だしことりこと其その中ちゆうのこと金きん銀ぎんのこと器うつわありこと數かずのこと十じゆ餘よ種たねかことどことりこと這このこと元げん  
 祿ろく十じゆ一いつ年ねんのこと事ことやこととこと夫つまよりこと十九じゆう年ねん過かてこと享きやう保ぽ元げん年ねんのこと其その墓かぶをこと少すくしこと傍はたへこと改かへ  
 葬まうまことることとこと墳ふんをこと穿うがりこと一いつ丈じやうをことりこと又またのこと壺かめ一いつつこととこと取とりこと出だしことりことはこととこと開ひらきこと見みることか

壺の中悉く金銀の器を都ての重サ或賈陌柒拾肆錢貳分あり有  
つてとて壺の中の器の上

経歴郭德潤 行宣政院福建分院提調官副使側失監  
客商謝福

花銀肆拾捌兩重とあり右通計金三貫百六拾貳目六分銀  
三貫百四拾九目九分あり

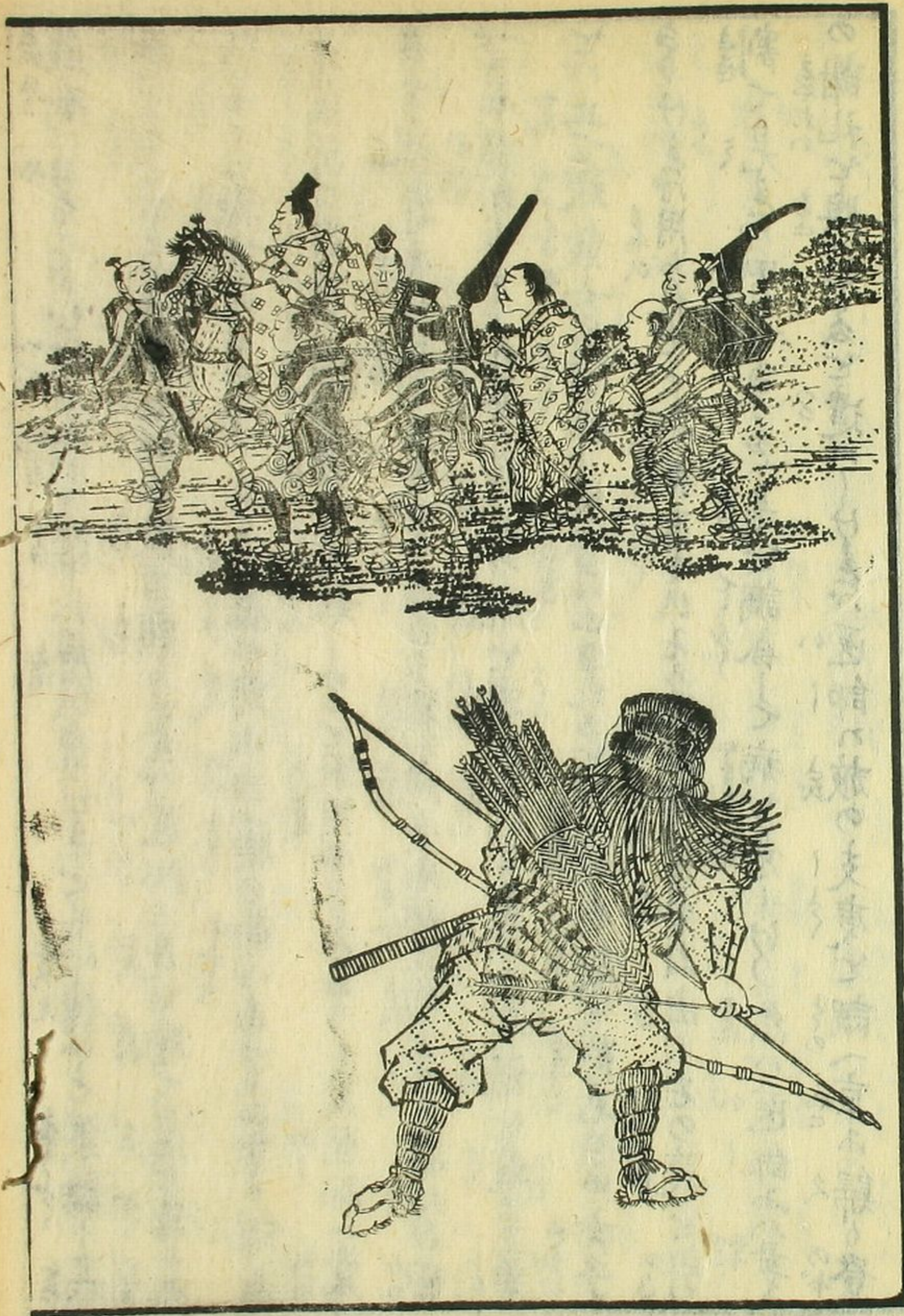
今より天保十二年百二十六年以前迄結託録不記より予是亦付て考へ  
る一説あり二編小委しく評解まべ

第四十六 貞盛の不仁

本朝通記小將門の乱貞盛秀郷の宿意と譏訴の起るとの尤然ある

開意四ノ二

貞盛の父常陸の大掾國香が將門の父鎮守府將軍良將の所領遺跡を  
押領して將門をも猶失るんと計りしより小次郎憤て國香を討り止事をほ  
さる故より貞盛父の仇を討んと思へども將門の威風小恐を叛反人ありと  
讒言を將門朝敵の名を蒙りて是非を関東小武備をあるひして最初よ  
王王位を奪はんを思ひ立しぬあつたを因小云將門の舎弟御厨三郎  
平將頼の武藏國多摩郡中野の原小陣取が田原の千晴が為小奸計小  
落されて死を其靈戰場小残りて人民を惱し祟るとる事止む天慶三  
年七月七日の打死より四百八十年程の間武藏野小怨念止まりけるを延文  
の頃一遍上人の三代目真教坊東を遊行の時里人の頼小依てその靈を鎮ん  
と芝崎村の神田橋の草菴を造立將頼の追善回向とて將頼の兄將門を



神小祭る此州庵が崎道場にて後小神田山日輪寺是より斯ま東  
 國の霊と現くまの将門のあらで其舎弟の將頼の亡魂をと思  
 る借將門を誑言する平貞盛の大悪不道の人ををあれ其故の貞盛  
 身小悪瘡出来て惱まが京より医師と迎へ下して療治を申付けま  
 其医師瘡をはくと察て兒干と言ふ薬を用ひきまへ愈ま兒干は  
 婦の腹と割き男子をその腹の兒を薬の加へ調合する事なれば甚得  
 がきりのるりと云けるを貞盛聞て思案ありが先医師を止め置て我子  
 左衛門尉維衡と近く招き兒干の事と云聞せ此薬と求る沙汰世不披  
 露せらま後難退まが幸るるる汝が妻の懐妊をまも左り  
 小乃女と聞ぬれば男子を多く思ふる是を殺して我小與へよとありけま

維衡の目もさむ程小驚き悲しむ思ひるのほど心得ゆと兼諾し其座と去てひとり彼医師小歎き頼むはさび医師は是を聴て氣の毒と思ひ某七の難と除き申べと貞盛の前小出薬の御心ありゆやと問ふ貞盛聞て左衛門尉が妻の懐妊とるを取用ゆるるるといふ医師の驚まする体ゆ夫の益もなき思し召り君と同ト血脉の胤が用ひて切の有べきや存知もさむ早く他人の胤と求め玉へとあり一人嫁と殺さ事とび止て炊飯女の懐妊と六月ぬれると引出しと腹を割見ら小女子りけとび用られとと打捨又々ひとり小姓婦と尋ね出しその腹を引割て見ると男子あり是と調合と病と愈しけり然ハ医師小尋く謝礼と與へいとも遣りけり醫師の旅の支度を調へ京小歸り登

らんと用意する中貞盛は左衛門尉と呼で我難病兒干の妙薬あて治しる由と彼医師が披露せん事疑る汝ハ弓の上手を従へて道小待り隠居て遠矢小くけて醫師を射殺し我小後難のるき様小せよと命とける心得ゆと其用意とるが密小此事と医師小告て其用意させければ醫師の従者小交り我代り小判官代と馬小乗せ山を越る時盗賊出来りて判官代と一矢小射落しる小と一医師とともめ逃ちりて京小登りけり

盗賊の如く小出立し左衛門尉の手の者ども少く貞盛の家來あり左衛門尉の父の命るれば是非なく此役を勤めて妻を殺さくし恩報し醫師の命を助け判官代と馬小乗せ是を射落

させて父の前を繕ひとり

實も國香の非義を見らうひよる貞盛の悪心その子の左衛門尉も心得難き人らむや妻の命を救ひ貫ひ恩報ふ医師の命を助けんと

まろの理るれども罪もろく恨もるまき判官代を射殺させし何事ぞ如斯人々の僥倖やと其非をのりく唯将門征伐の名を高く知られし

不思議なれ但し俗書ゆゑ其非をのりねど本朝通紀の如き正しき物あり貞盛が武名をよるまき非義をのりて道理至極の筆の跡を尊と

又曰右の兒干を用ひ醫師も我朝の仁術を弁へる醫師ありあらで異邦の邪術を好む曲者なるべし

第四十八 春盤

歳首の供へ用ひ喰積の唐土を春盤といふ物なりと彼國を栢枝大橋の類を積飾礼とまると日本を喰積といふが唐山の春盤よ

つゝの其意も宜しうらん先食膳の供ひり品々の機能を記して婦女子の爲の解しませし造り飾り松竹の八千代を壽ふ云でも知れん

- 米。乾栗。算盤。榎。神馬藻。橙。鳳尾州
- 。杠葉。昆布。藪柑子

右の如く喰ふべき物を積あつて長生の用意を祝ふなり然らば昔の唯飾り供へ置るあつて他も喰せ家内を食しするものなるべし米の氣味甘くと毒る血脉と通し五臓を和げ顔の色を好し

胃の氣を補益肌肉を長し筋骨を壯ふ心志を強く腎精  
と益し肺氣を益せ

凡元氣を補ひ腎精を助るの精粳米の外小勝まのりとど  
今の人米の常小食とて珠一ころねば藥ありと心付む其能生

命を保らの大妙藥と思ひ唯存命の中は是を食するのとの  
輕一めら誤るるも此尊き米の妙藥と思ひ陽精を起し腎

藥を貪り強て魚鳥獸の肉を喰ひ元氣を益んとするの甚不  
仁の所業を命を促むるの業を行ふ小等

又曰米と艾の實を等分小合せ粥小煮て食すれば腎精を益  
志を強く耳と聰く眼を明らるる

海藻の氣味苦鹹寒く毒あり瘡結ると散す頸下の痛

と和げ腫を散し腹中の雷鳴を治し水腫を下し小便を利し  
但し藥を吞て居る

樞の氣味甘くして毒あり常小食をば五痔を治し蟲を去り  
寸白を治し筋骨を強く榮衛の行よく眼を明らして身を輕

く陽根を強く又樞の油の本草小記さねば唐山人の知ら  
ざるカスルとりの紅毛人日本へ渡りし時日本の樞の油を看

て上品ありと賞しとど  
實我國の樞の油の金瘡切疵小妙なり腫物の肉をあげ

痛を和らげ惡血を去り腰の痛ぬりてよく

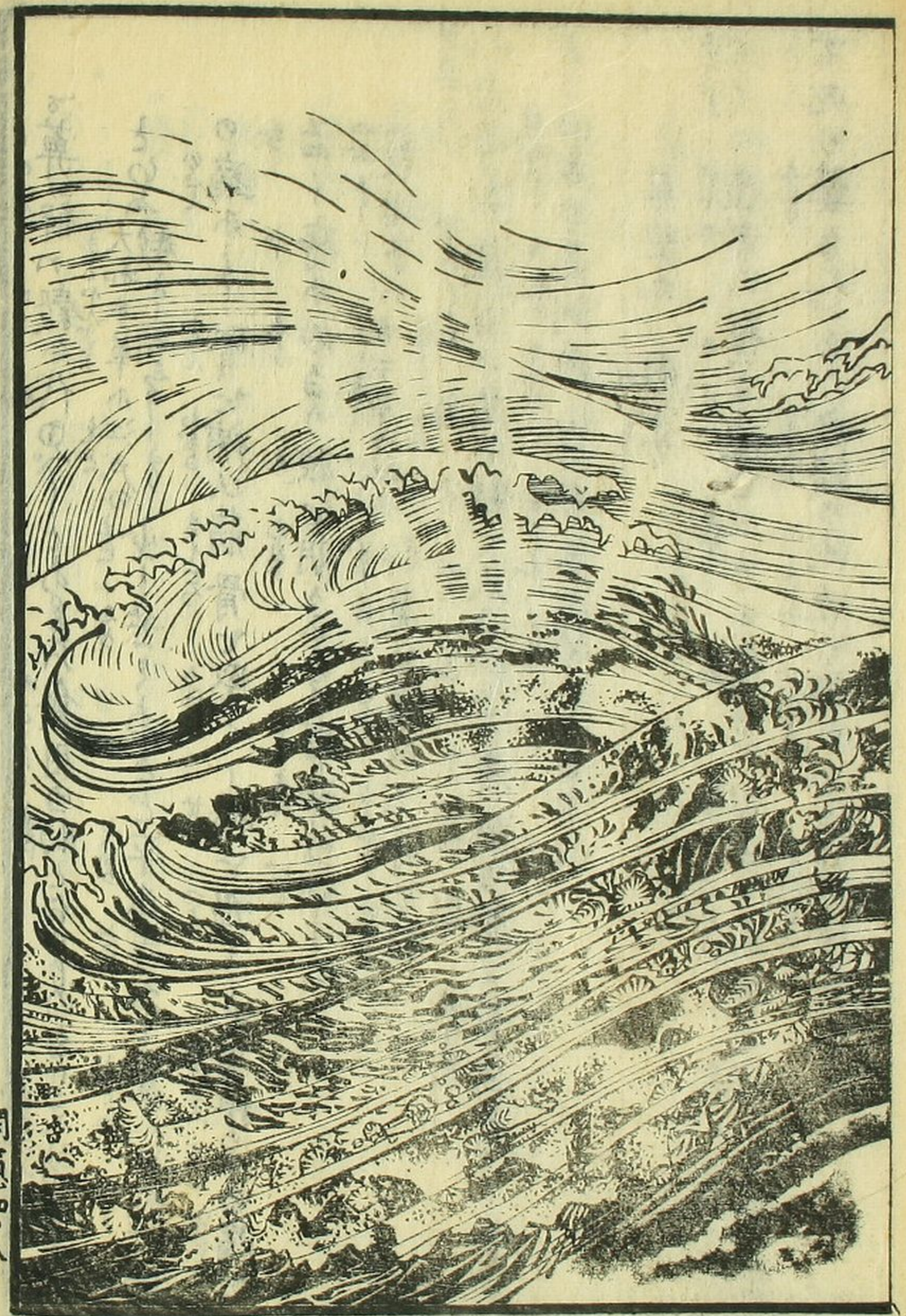


杠葉（この外薬あり）の腹中（この外薬あり）のあられありく支るゆう酒の熱を醒て胸中の苦く  
 きせ治ま（この外薬あり）  
 鳳尾草（又毒）これの文字もゆでう歯の乃采とのひ明賢妙薬集  
 小も出て栄衛の行せよくまらりのあり  
 乾栗（温ふ）て毒を氣を益て腎を補ひ其外功能（兒小）  
 昆布（氣味）鹹（寒）滑（毒）悪瘡を治し瘡を散し  
 水腫を下し肺をうるをま  
 橙（氣味）酸（寒）毒を腸胃の悪き氣を去り食を消し胸  
 の煩悶をとと病酒小用ひて忽ち小醒ま

苜蓿（穀）の代（の）ぐとあま（食）食用の助とるものなり又諸病ふ吉  
 と（大和本草）の江戸のま（少）苦とあまど平（毒）第一の能の腰  
 の痛ふ（腎）を補ひ筋骨を堅く精を強く男根中の痛を  
 治し痔の妙なり眼を明らふ事神の如し  
 敷柑子（古本草）の牡丹（邪氣）を穢ひ不浄を除  
 如斯るれば歳首（集）積て人の供の事病を除き長生（ら）めん  
 まる日本の嘉例唐山の春盤（勝）るらん  
 第四十九 耐火斗  
 正月の禮者（耐）斗蛇と三方（載）せ出ま（春盤）同く長生  
 不死の薬るればるり我國の乾蛇と海外（甚）珍貴とま



食所とや  
 木曾の  
 小町の  
 桂の  
 山



開  
 八  
 日

人皇第七代孝靈天皇四十五年（西暦五九二年）唐山秦の始皇位（西暦二四六年）即長生不老の薬と道士（西暦二四六年）が求む我國古代の長壽を秦の國めて聽傳へ東方の倭人の仙方を得て悉く長命なりといひ又不死の薬（西暦二四六年）の日本あり日本海中の石決明（西暦二四六年）を長生の妙薬といふ（西暦二四六年）徐福是を求る為め我朝不渡海して秦不歸（西暦二四六年）今も猶唐山（西暦二四六年）の乾蛇（西暦二四六年）一枚を直一貫文（西暦二四六年）の買昔の熨斗蛇と食物（西暦二四六年）のせしと當今の唯祝義の贈り（西暦二四六年）の添て遺り物との思へり併夫も長生不老の薬（西暦二四六年）をばよそ壽きて添贈るものと知る（西暦二四六年）長熨斗蛇と水（西暦二四六年）の清しと云ふ（西暦二四六年）但し補ひ（西暦二四六年）の妙薬を用ひ（西暦二四六年）りとも身（西暦二四六年）の行ひ悪く（西暦二四六年）の妙薬補劑の益（西暦二四六年）ありと誰も知る（西暦二四六年）飲養生の歌あり（西暦二四六年）。氣の長く勤（西暦二四六年）の強く色薄く食細く（西暦二四六年）心廣く（西暦二四六年）

關應四九

第五十 怪事の説

世俗の言（西暦二四六年）の鵲（西暦二四六年）の吉語と告げ傳へ鴉（西暦二四六年）の凶事を主る故婦女と小人（西暦二四六年）の常小鴉（西暦二四六年）の善惡と云て多（西暦二四六年）くの這を聞事（西暦二四六年）を忌嫌（西暦二四六年）めて憎む（西暦二四六年）甚（西暦二四六年）き心得違へる（西暦二四六年）。萬物の靈（西暦二四六年）と尊（西暦二四六年）る人間（西暦二四六年）が狐（西暦二四六年）のさ（西暦二四六年）し声（西暦二四六年）と怖（西暦二四六年）る鴉（西暦二四六年）の善惡と云て（西暦二四六年）。氣（西暦二四六年）を惱（西暦二四六年）む。又是（西暦二四六年）と憎む事（西暦二四六年）が有（西暦二四六年）る。論（西暦二四六年）の禽獸（西暦二四六年）の類（西暦二四六年）が声（西暦二四六年）を出（西暦二四六年）て凶事（西暦二四六年）を無始（西暦二四六年）の告る事（西暦二四六年）あらば人の為（西暦二四六年）に大（西暦二四六年）なる忠実（西暦二四六年）ありと忌憎（西暦二四六年）むのゆゑあり。禽獸の凶声（西暦二四六年）を聞て（西暦二四六年）あらば言（西暦二四六年）と慎（西暦二四六年）む。患（西暦二四六年）を防（西暦二四六年）が災（西暦二四六年）害（西暦二四六年）を除事（西暦二四六年）も有（西暦二四六年）る。然（西暦二四六年）る。和漢古今（西暦二四六年）比類（西暦二四六年）の物（西暦二四六年）思（西暦二四六年）はる人（西暦二四六年）多（西暦二四六年）く（西暦二四六年）と察（西暦二四六年）て涉（西暦二四六年）世（西暦二四六年）録（西暦二四六年）の怪事（西暦二四六年）と（西暦二四六年）。術（西暦二四六年）と著（西暦二四六年）し。鼯（西暦二四六年）の鳴声（西暦二四六年）。狐（西暦二四六年）の吼（西暦二四六年）鼠（西暦二四六年）の噪（西暦二四六年）鷄（西暦二四六年）の宵鳴（西暦二四六年）。鳥（西暦二四六年）声（西暦二四六年）。釜（西暦二四六年）の鳴音（西暦二四六年）。此類（西暦二四六年）の悉（西暦二四六年）く。鬼怪（西暦二四六年）の所（西暦二四六年）為（西暦二四六年）る。其所（西暦二四六年）為（西暦二四六年）とる。鬼（西暦二四六年）の名（西暦二四六年）と知覚（西暦二四六年）て呼（西暦二四六年）節（西暦二四六年）の鬼

怖として火をさきまきあつて却て其家の吉事とあること記す

狗上入屋事あり

○ 此則春女と名鬼の所業なり

狗上床事あり

○ 此と名神霞鬼の業といふ

宵聞鶏聲

○ 此鬼と名賊吏

屋上作聲と名事あり

○ 此と夜庭と名鬼の所業とす

釜鳴音

○ 此と飲女と名鬼の業といふ

鳥人夜小便せ汚

○ 野鳥入屋裏  
○ 此と不穴と名く

血汚人衣事あり其鬼と名遊光

狐狸聲ありハ

○ 其鬼怪と名懷珠

此外猶多あり。右小記を如き怪事ある時ハ諭ハ釜の鳴時ハ臨んで其釜の前と三尺隔て彼釜の鳴業をまら。飲女といふ鬼の名と高らふ呼ぶとき其災の怪物地中ハ入事三尺還て其家の福とあるといふ鬼の名

と呼て。災と福なる事、夫々の鬼の名を覺て呼へ。這の大人君子の一笑  
とるべき事と知れども。世俗の氣あうけて。悩む事あるが其崇と穢と術と  
記して。些小婦女子の心を安堵さうめんせり。  
因の云。悪しき夢を見るとき。臨月天光と三度呼時。忽ち悪夢を吉祥  
とるまことり

第五十一 丸木船

房州安房郡山刀村の船越大明神と云社あり。抑當社の神代の古  
跡ありといふ。山下の海波満々として。社前までも浪せうち奇事有り。是を  
下の宮といふ。上の宮の四五町程の上り。唯大なる洞穴ありとぞ。深山と  
いふありねど。何ともく物もなき。幾千代と。經のみやう。神さびて。森々

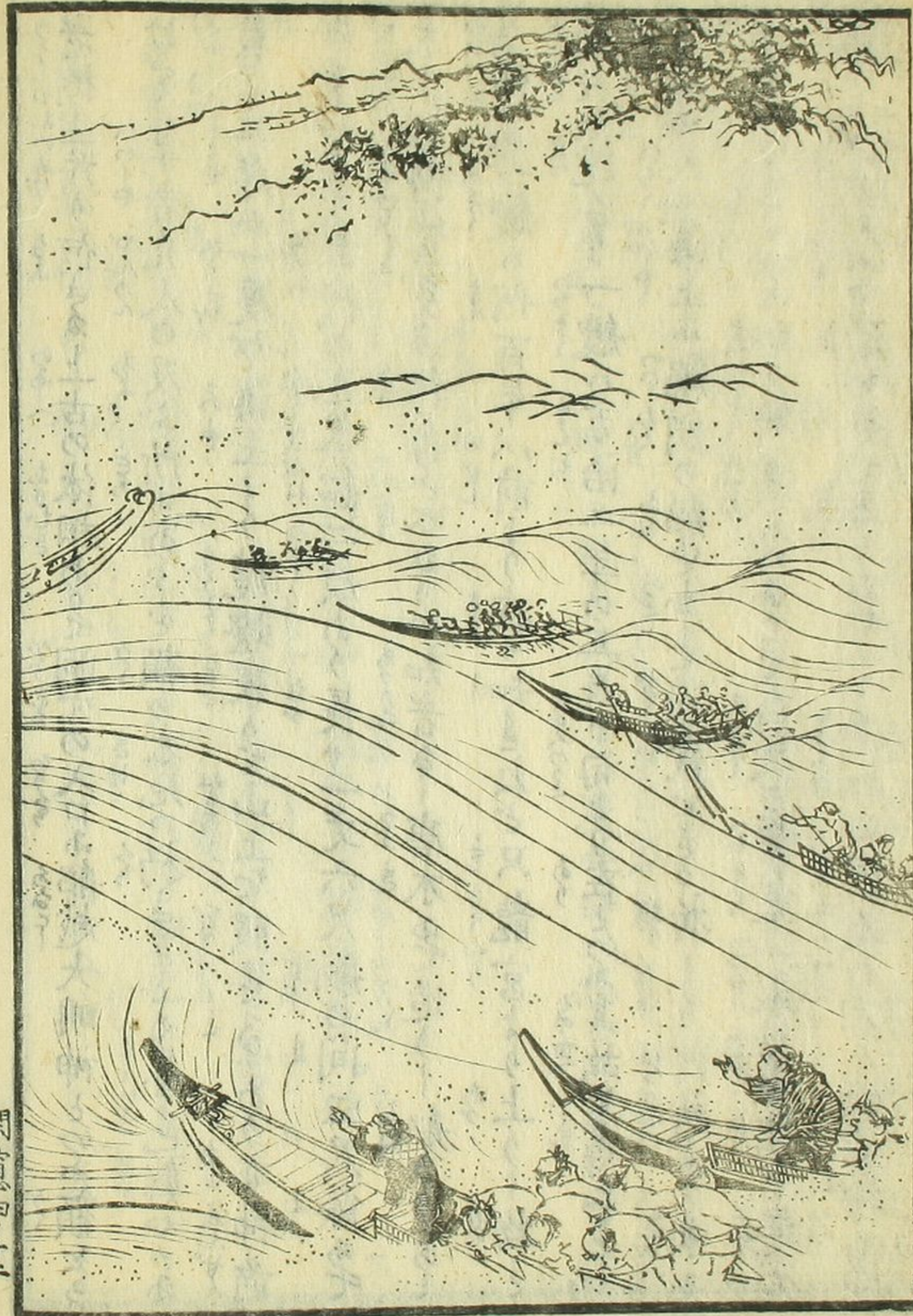
閑意四士

老樹生茂り何さる上古の体相あり。洞穴の入口の船越大明神といふ額せう  
けう筆者凡人の及ぶ所あり。額の木地の朽もとも墨色鮮やう。小  
尊一三年の一度。海上より龍燈来りて山上を照さるあり。亦神前  
ふまげらる。古代の丸木船二艘あり。長サ一丈六尺。舳の間五尺餘あり。  
木色の薄紫なるが竹といふ木まりや。知者さる。唐木で造りし船ありといふ。  
云傳ふ一艘の何百年以前より在る。知れねど。只龍宮より上りし物と  
土人の説より一艘の万治二年の五月下旬より在るといふ。其故を尋ねると  
土地の人々。海上の鵜網の船を出して漁獵せると折しも何所より来る  
ともる。右の丸木船一艘。乗人ありて。白紙の幣束一本。船の中へ建て  
ありしが。漁人等這を見て。各々あやう。其船の乗近付んと。艫を押して

海上神船  
の圖



國直



閑窓四十二



百文の錢と九十六文と定めし唐山の玄宗皇帝の時安祿山とりる者か  
四文づの運上を取為工夫せしより發るると云ふ悪人の思ひ付より度られ  
ども丁百より遣ふ便利なれば千歳の後まで是を用ふるのるるそ  
日本にて関東管領の長臣長尾將監の孫よりける長尾景春九六の錢の  
通用とすれりとのぞ

因曰當時金壹歩と百疋とりての錢の數と云ひ詞よりの云るる  
志多青銅十疋二十疋くら始られれば錢の相場金壹分付し  
一貫文さるる百疋とりて宜けれど當時の相場金壹分付し一貫

六百五十或の一貫七百文さるる金壹歩と百七十疋と不言の  
數の當らぬ度らる昔の錢と數る目安の駒引錢と百文の

十文加へり依之駒引錢が十疋あるる青銅十疋二百文と二十疋と呼  
らるとぞ實の然もありさるる疋の字の金銀の縁き布類帛  
類の二疋二疋の二反づきの印の駒引錢と二反の端へ一文縫  
付るる言初りのるるとり亦錢のゆを記せ序の云よの程  
予が水滸後日傳を翻譯さるとも発初の目小女と使わたり  
て物を調へる端錢のはりて二錢取て歸り机の底に置いと何  
心るる手取見ま左の如し



是則唐山宋の代第七主哲宗皇帝の時の錢の七然も元祐



八年紹聖の四年つゞきたる年号なり  
堀河天皇の御宇ありしなり  
天保十二年去りて七百五十餘  
年の古銭ありこの世の君は錢を珍しむる様をとも宋の世の  
水滸後傳と出像國字不著と時小臨んで求めむせざる其代の  
年号と鑄する元祐紹聖の二錢と一度小得する夏子著述の爲に  
の幸ありと奇なる夏小見也

第五十四 夜更

千賀屋州といふ隨筆の夜更といふ夏小の國を夜更に倚て夜仕  
夏更なるは爐小鍋とて置て廻る仕更とて夏小の夜鍋と言ふる  
る小てすれりといふ豈伊豆の片斷めて然ありとも夫が世の廣く通言と

夏更名日中の仕業と夜小入る延とて夏小の夜延仕業と言ふる  
より夜延ハ則ち夜延といふるなり

第五十五 櫓の功能

世の人櫓の枝葉ハ佛夏小の用ありのて忌み様小嫌ふて不吉の物  
とて大ひる心得とて櫓ハ昔歌やもよもといふ萬葉集小曾根の  
好忠

愛宕山櫓が原ハ雪はもり

花つむ人の跡どふも

櫓ハ愛宕の名木より亦櫓ハ其香清浄めて神佛小備へ不浄と除く  
墓原小櫓とて置ハ獸怖めて墓とあま人の尸と破る夏小の夫

史 故小墓所へ備へて除く用心と云ふ山近き田畑を猪猿の類が畑物  
と取り取る様小多く櫛と植又へ堀て置芋など小櫛の枝を折て蓋と置  
獸來りて取りあへむと云ふ猶功能多し眼病の熱と醒とる墓所の水  
小落ちて腐る櫛の露と眼小付とバ忽ち平愈と櫛の葉を煎じ用ひ  
てもよ

櫛の眼熱と醒と妙功ありの齋藤祐仙と呼と眼病と治  
も良医の予小教へらと云ふ事と云ふ事あり

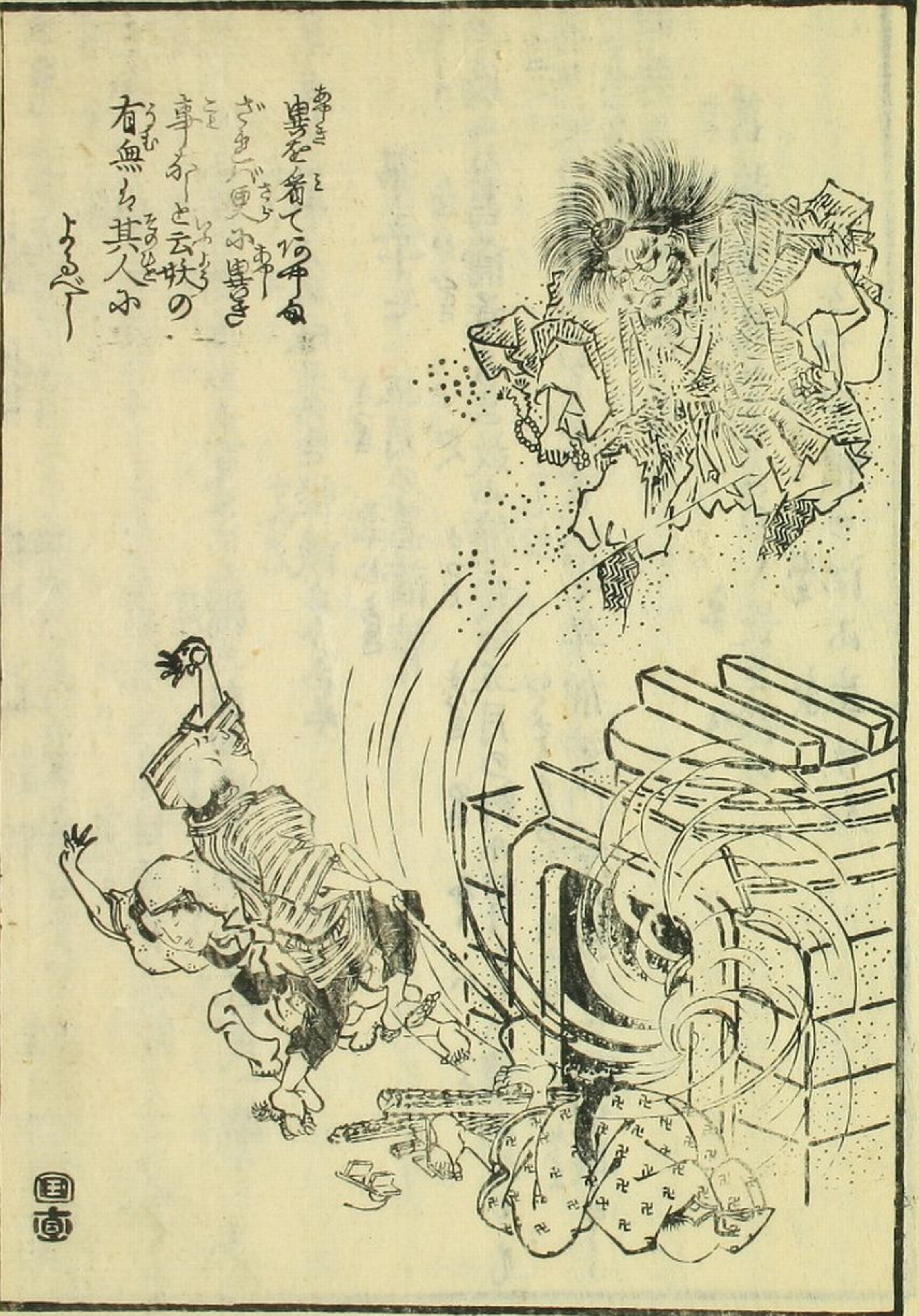
本法寺の境内不在る熊谷氏の墓へ願と云ふ其墓の水と眼病小  
用ひ平愈と云ふ櫛の水の徳と云ふ  
在り熊谷稻荷の社あり

第五十六 山伏怪異

前小云千賀屋草といふ随筆ハ桂秀樹といふ人の著る書也正直小  
記一作意ハ加へぬの様小被察其書の末小延享卯五月とあり云々  
保十二年よりハ九十六年以前の著述なり其巻中一怪異と記さる

有る以前小毎度竈の後より身の丈高く顔色怖ろしき山伏ガ忽  
然と頭きて家内と見廻さるあり家内の人々是と見て啖々と云ふ  
中消さるる事主四五代の以前より聞傳へる事ども最初ハ何年

の昔何時より出初しといふ事と知らむ借その源三郎の老母煩ひて十四五日  
 絶食の大病となり起臥も心小任せむ夜伽の者も勞までいさう眠り  
 小付んとすまは彼老母の身体健くするがごとく床の中より起上り四方  
 小眼を配りて怖ろき顔色ふる由と夜伽の者ひそり小怖まで明きけ  
 源三郎の父源大夫常事らむと思ひ心せ付て自身夜伽とせしが  
 夜中不又く例の山伏ク竈の前小頭と出いと家内の者が騒ぐ声基所  
 の方小聴あり源大夫へありと老母の側を放と次の間へ出らるが其  
 間の老母の行衛知るとさあなりと源大夫源三郎へは及たむと家  
 内の人々驚き騒ぎ尋ねたりともその影も知る程近き海の磯辺小  
 老母の着て居らる夜夜と常小手持し珠數が捨てありと更入水せしむ



事をして  
 事か云杖の  
 有無其入ふ  
 こと  
 事か云杖の  
 有無其入ふ  
 こと

のるふんと其日と忌日とと佛堂と行ひ来る様ゆるれり其夜出口の門を  
二つ折て出する様ありといふそのく奈何なる怪異なりや解ざり又その  
後の彼山伏の傳も出る夏と源三郎が直の師匠の桂氏へ語りし云  
よとより最く氣味よく怪談ありと云

第五十七 五月の菖蒲草

奥羽の菖蒲草を故の蒲黄と五月の軒の葺と云ひ傳ふれども  
菖蒲草のるさゆらあを寛治七年郁芳門院の根合の歌と撰と  
時藤原善孝の歌

菖蒲草曳手もこのく長き根の

いりて安積の沼に生けん

斯あま陸奥小姓古より菖蒲草有と見又安積の沼の花且見の名所ゆ  
陸奥の安積の沼の花がら且見る度小恋やと云ふ云古歌もあり但  
此沼の花且見の菰のゆゆて浮藻ゆらあを今俗小云花勝見の藻花ゆ  
本艸小田字草一名を破銅錢といふのり金魚鉢をい入て詠める水草  
るは軒の葺且見ゆらあを軒の葺且見といふ花の咲る真菰あり  
不依て花出 儲陸奥あて五月の節句の菖蒲と軒の葺を且見を替て葺るゆ  
來とといふ 中将藤原の实方奥洲小下り玉ひ時陸奥人が端午の節會を同申  
せし何のあやめも知らぬ賤軒端ゆらあを都小同の菖蒲と葺へまご  
とて且見を葺せらまけりより菖蒲と不用且見を用い來りといふ抑中  
將実方朝臣の其心騒がく高慢強き人ゆて在りゆの世小云傳へ話

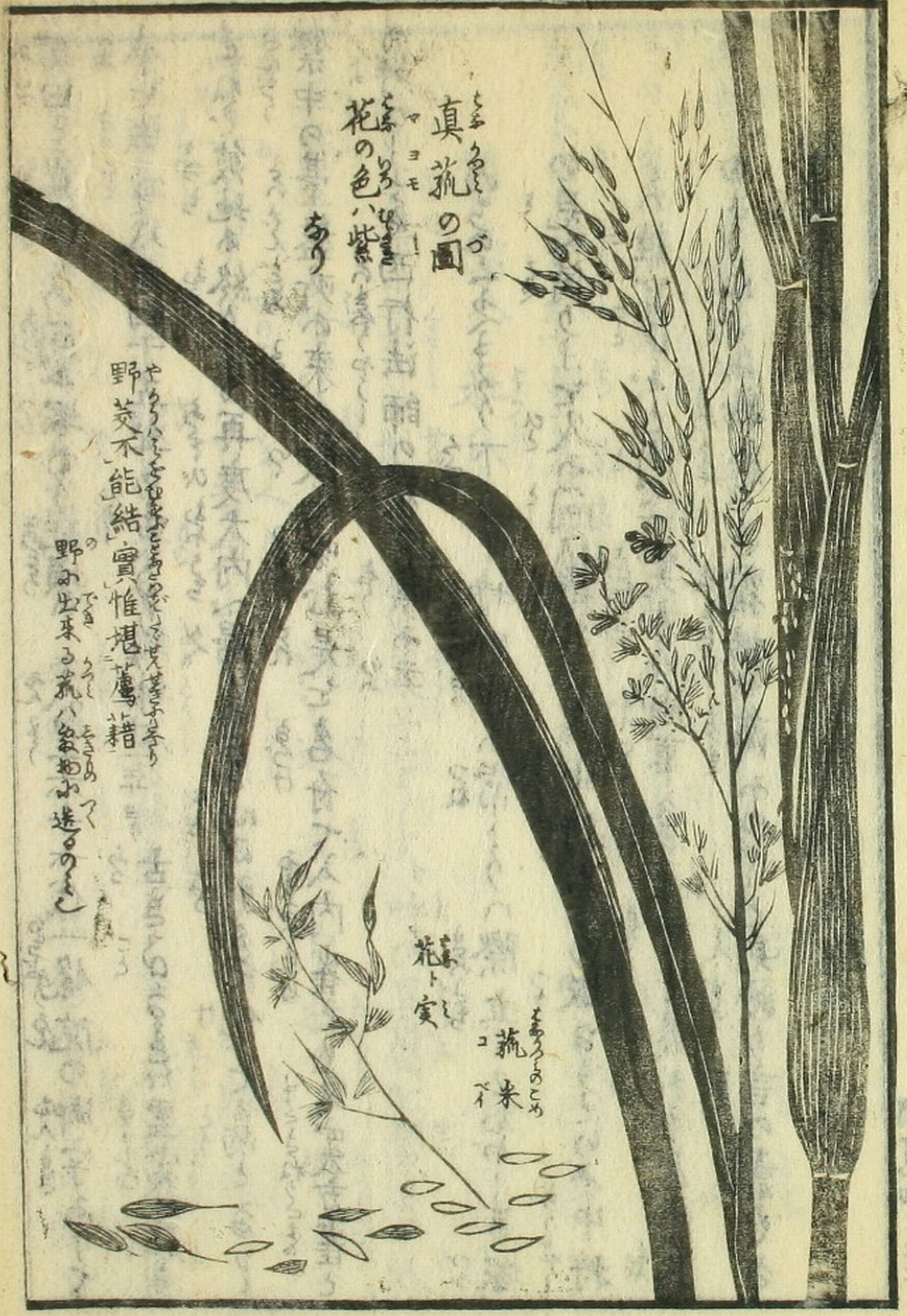
種タネ中なか推おし量りょうらとて頼たの母ぼ一ひとくも都みやこ人ひとなりと東あづまの端はたの人ひとなりとて心こころ小こ変へる  
 夏なつやハあり軒のき小こ菖あやめ蒲あやめと葺あやめやどの業わざ中なかも都みやこ小こ同どうあり心こころまじり陸むら奥おく人ひとの  
 爲なまと思おもふと一ひと夏なつの腹はら黒くろくも拙つたみけは其その高たか慢まんの心こころあて他ほかと賤しんしめし  
 卿きやうと云いふも不足ふそくと陸むら奥おく小こ終はつりて後のちも猶なほ雀すずめ小こ化けと大おほ内うち小こ入いりて恥ち  
 一ひとまき名なもとてそらと一ひとのの按おんむる小こ陸むら奥おくあて五月ごご四よ日にち小こ且かつ見みと葺あやめハ  
 中ちゆう将しやうの沙さ汰たありありと且かつ見みも菖あやめ蒲あやめもその功こう能のう小こ勝しょうり劣せつり多おほく殊こと小こ都みやこ  
 小こ東あづま路ぢも軒のき端はた小こ葺あやめ菖あやめ蒲あやめハ沼ぬま菖あやめ蒲あやめあて花はなハ一ひと陸むら奥おくの蒲あやめ黄わうハ花はなあり  
 て美み麗れいけは軒のき端はた小こ葺あやめてもその詠えいめ最さい愛あい多おほく一ひと都みやこて五月ごご四よ日にち小こ軒のき小こ  
 菖あやめ蒲あやめと葺あやめハ何なにの爲ため也なり此この日ひより盛さか夏なつありて毒どく虫ちゆう多おほく生なり人家にやうか小こ入いらん  
 とよるる軒のき端はた小こ蓬よもぎ菖あやめ蒲あやめ其その外ほか虫ちゆうと除のぞく草くさ木きと軒のき小こ葺あやめ菖あやめ蒲あやめと葺あやめ蒲あやめ  
 関せき憲けん四し年ねん九く

小こ限げんりりりありありと然しかれ古こ歌かも菖あやめ蒲あやめ葺あやめ蓬よもぎ葺あやめ棟とう葺あやめ俗俗小こせん  
 凡おほ五ご月げつ五ご日にちの水みづ草くさハ諸しよの毒どく虫ちゆうと除のぞく去き功こう能のう多おほく浮う萍へいと陰かげ干かりて  
 團だん子ごの如ごとく搗つく置おき蚊かの如ごとく消くて水みづありといふ  
 因よ云い真ま菖あやめの異い名な。艾あ草くさ。蔣しやう草くさといふ古こ代だい真ま菖あやめと依よ小こ作つくる當あた  
 時ま稻いね葉はあて作つくる物もの也なりよもと云い昔むかし菖あやめと以もつてありといふ名なあり只ただ  
 菖あやめと云いふ小こ真ま菖あやめと呼よび答こたへる詞ことばあて真まの字あざなハ直ちかといふ心こころありと然しかれ  
 小こ真ま菖あやめハ真ま菖あやめといふより亦また唐たう山さんの真ま菖あやめの字あざなと菖あやめ米まいと称なづ  
 或あるハ薹たい菖あやめとも稱なづたり既すで小こ杜と牧まきガ詩うたハ薹たい菖あやめと粥か小こ煮なて食たせし  
 菖あやめと連つねてあり土とち地ぢのトろ一ひとま所ところ小こ生なる真ま菖あやめハ花はな咲さ実みを  
 生なりて米まいの如ごとくといふ 日本にっぽんも真ま菖あやめの白しろ根ねと煮なて食た用よう小こ

せしり多し腸胃の熱を醒し老を養ふ食物なりといふ花も咲り  
 ざる沼菖蒲よりハ奥カ切の真菖草がたろろハ勝りハ物もよまや  
 〇亦菖蒲酒と造るハ沼菖蒲を切て入るハ益々酒ハ漬て邪氣を  
 拂ふ薬ハ石菖蒲と用ゑハ雄黄を少く加へて用ゆれば邪氣を去  
 りぞける妙薬なり  
 又云真菖小米の出来る證古あり其菖を雕菖といふ

雕菖胡米

雕菖禮記注雕胡枚乗作安胡之飯周官魚宜菖一名蔣蔕心中黒  
 點者名烏鬢俗名芟芟自有一種米芟  
 藤原の实方ハ長徳四年十一月十二日奥カ切仙臺ハ程近き所あり死



真菖の圖

花の色ハ紫あり

菖蒲

コメ

野菖不能結實惟堪薦藉

野菖出來ハ菖ハ菖也ハ造り

信田と岩沼との間の塚あり此頃の 人皇六十六代一條院の御宇ありて  
今と去り八百四十五年の古へあり 天保十二年ヨリ 古き頃のことが虚実の知ら  
まねど彼地の終りくも再度大内へ帰りしま心引きて化して鳥とるり  
林の中の墓盤所来り飯七啄む是七名付て入内雀とも又実方雀と  
も呼びしとて西行法師の家の集ふ云

みちのくあまより下りし時野中み常よりの際立しとあがし塚  
の見へ侍りしと人み伺ひ侍りしと中將ぬの塚ありしとらみ中將  
と誰がゆきと伺へ実方の御事ありと申も最あらしとみ覺  
ゆさうぬぶ物悲しき霜枯の薄やのぐと見渡り言の葉もる  
ま心ちん

朽もせぬ其名をうりせとめ置て枯野の薄さ形見とをる  
斯詠せし西行法師も六百三十八年の故人ありと思へば讀書の喜も  
予のころで書讀人の千年過ぬし往古の人と友と語り語る心地を爲え  
思ふ古き艸紙を好む人の長生不老の仙も勝りし樂と云へきり

第五十八 杜氏

世俗の言葉の菓子を製する者と菓子を造りしと呼び豆腐を製する人  
と豆腐を造りしと呼ぶ誤りるるべし酒を造る者をも杜氏と名  
呼も可るらん其故の古昔唐山の杜康といへる人始めて酒を造りし  
る唐土の酒を醸する者と酒杜氏と称来りしなり然らば杜氏と名  
号するの酒を造る人み限るし亦酒を造る名づくる婦女子の詞も

最古いさより云いひ初はつて其故そのことあり白樂天はくらくてんが詩うたの酒さけと壺つぼ中の竹葉ちくえつと云いひ其その
  
 あまた又また白氏はくし文集もんじふの云いひく宜城ぎせうの九釀酒きゅうらうしゆと竹葉酒ちくえつしゆと辨わかくとのまま酒さけの異い
  
 名なと竹葉ちくえつと云いひて倭國やまとの傳つとへて篠ささといいふも一理いちりあるあり夏なつをべし。

曲亭主人著  
 玄同放言 全部六冊  
 蓬廬青々山人著  
 俳家奇人談 全部六冊

東京書林  
 日本橋尾本石町二丁目  
 萬笈閣江島喜兵衛版

閑窓四ノ林

48-13828

諸國

尾州 名古屋本町六丁目	片野 東四郎
尾州 名古屋本町土丁目	梶田 勘助
勢州 四日市南町	伊藤 善太郎
美濃 岐阜米屋町	三浦 源助
美濃 大垣俵町	平野 利兵衛
遠州 濱松紺屋町	齋藤 源三郎
駿州 静岡岡呉服町五丁目	佐藤 俊平
駿州 沼津浅間町	擁萬 堂三郎
信州 長野仁王門前	西澤 喜太郎
信州 小諸荒町	相場 七左衛門
下總 野田五丁目	茂水 林藏
下總 國佐原	朝野 利兵衛



三 府 書 肆

西京寺町通四條  
 全 寺町通佛光寺上  
 大坂比久太郎町四町目  
 全 南久室寺町四町目  
 全 比久室寺町四町目  
 全 備後町四町目  
 東京芝三嶋町  
 全 通り二町目  
 全 壹町目  
 全 淺草茅町二丁目  
 全 通り旅籠町  
 全 本石町二丁目

田中治兵衛  
 川勝德治郎  
 柳原喜兵衛  
 前川善兵衛  
 前川源七郎  
 吉岡平助  
 山中市兵衛  
 北田佐兵衛  
 北田茂兵衛  
 北澤伊八  
 東生龜治郎  
 江島喜兵衛

書 肆

常明水戸泉町  
 磐城中村宇多川  
 陸前仙臺園分町  
 陸中一ノ關  
 陸奥青森博勞町  
 羽前山形六日町  
 岩代福島通五町目  
 武勇 深谷驛  
 全 所  
 越後長岡  
 越後高田吳服町  
 越後四ノ谷濱村

松後善之助  
 志賀茂卿  
 伊勢安右衛門  
 及川兵治郎  
 柿崎忠兵衛  
 市村五郎兵衛  
 齋藤彦太郎  
 小野脩三郎  
 酒井省吾  
 中村作平  
 水多勝太郎  
 佐藤友吉

